

資料館の小部屋

その4

現在、歴史民俗資料館は収蔵庫の空調設備改修工事のため、休館中です。展示をご覧いただけないため、学芸員おすすめの所蔵品を紹介してきました。最終回は、五月ヶ丘古墳から出土した「陶棺」です。

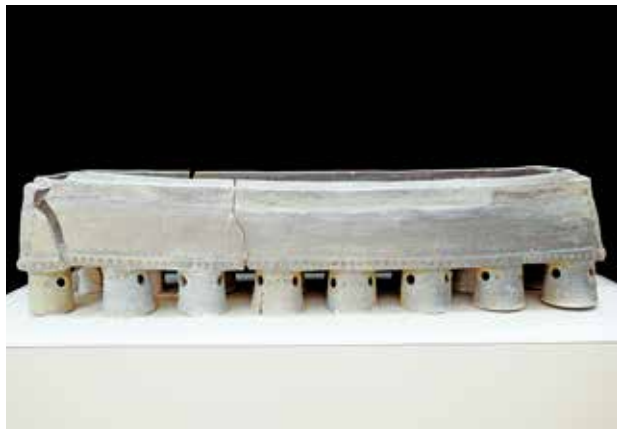
古墳のなかには？

歴史民俗資料館の裏手にある五月ヶ丘古墳は、五月ヶ丘丘陵の南麓を利用して築かれた7世紀の古墳です。柿畑として耕作されたため、墳丘は削られ残っていませんが、直径約8メートルの小規模な円墳と推定されています。

埋葬施設は、長さ3.5メートルの横穴式石室で、天井石及び西側壁のほとんどが失われていました。

日本列島では、弥生時代以降、地域同士のまとまり(クニ)ができればはじめ、3世紀以降、その指導者と一族を葬った古墳がつくられるようになりました。こうした古墳がつくられた3世紀から7世紀を、古墳時代とよんでいます(古墳そのものは8世紀にもつくられました)。

当初、埋葬施設は縦穴式石室(櫛)や木



▲五月ヶ丘古墳の陶棺

でできた棺のまわりを粘土で覆う粘土櫛が主に用いられました。この埋葬施設は、一度被葬者を埋葬すると二度と開けることができないものでした。6世紀になると、朝鮮半島を起源とする横穴式石室が、近畿地方で普及するようになります。横穴式石室は、外部から石室内へ出入りできるもので、その採用はそれまでの埋葬儀礼や、当時の人々の死生観に変化をもたらしました。

陶棺ってなに？

五月ヶ丘古墳の石室内からは、約2メートルの陶棺が出土しました。

古墳に納められる棺は、主に木、石な

どでつくられました。一部の地域では「陶棺」という粘土を焼いてつくられた棺が用いられました。陶棺は、6世紀中ごろから8世紀初めごろまで使われ、全国で800基以上確認されています。その半数以上が岡山県北部、次いで近畿地方で数多く出土しています。

材質は、野焼きで焼かれた黄褐色の土師質と、窯で焼かれた青灰色の堅い須恵質のものがあります。また、ふたの形状は、亀の甲羅のような形をしたものと、家の屋根のような形をしたものがあります。五月ヶ丘古墳の陶棺は、須恵質で、ふたの部分は失われていましたが、家の屋根のような形だったと考えられます。

また、陶棺は、多くの脚を持つ特異な形をしており、五月ヶ丘古墳の陶棺も円筒形の脚が合計16本あります。

須恵器生産との関係

須恵器は、5世紀頃に朝鮮半島から伝わり、日本各地で生産が行われるようになります。豊中市と吹田市に広がる千里丘陵にも須恵器の窯跡群があります。その範囲内にある豊中市太古塚古墳群の



▲復元された五月ヶ丘古墳の石室

陶棺には須恵器製作と同じ痕跡があり、その被葬者と須恵器を製作する集団との関係が指摘されています。五月ヶ丘古墳は千里丘陵から離れていますが、陶棺には須恵器製作と同じ痕跡があり、同古墳の被葬者も須恵器を製作する集団と関係していたのかもしれませんが。

今回、紹介した五月ヶ丘古墳は、石室が復元され、いつでも自由に見学することができます。出土した陶棺は、再開後の資料館常設展で展示する予定です。

歴史民俗資料館は数多く地域に関する資料を所蔵しています。4回にわたり、学芸員のおすすめする所蔵品を紹介してきました。「ときの輝き」を通じて、池田の歴史や文化に興味を持ってもらえたら嬉しいですよ。

◆問い合わせは歴史民俗資料館

☎751・3019